

UIFA JAPON NEWSLETTER

■主な内容

第4回総会報告

ハンガリー大会研究発表要旨・参加者の紹介・ハンガリー語のレッスン

会員の自己紹介 No.2

新役員の紹介

寄稿〈百聞不一見〉

新刊紹介

■第4回UIFA JAPON総会報告

川嶋 幸江

1996年6月8日(土曜日)13時30分~14時まで、会場は池袋の東京芸術劇場5階中会議室にて第4回UIFA JAPON総会が開催された。

最初に小川信子副会長より、総会の開会にあたって、会員総数88名の内、出席者17名、委任状30通、合計47名で会員総数の半数以上に達したので総会は成立すると宣言された。

次に司会進行役として松川淳子理事が指名され、その司会のもとに議事が進行された。

まず、中原暢子会長が1996年度にすでに動きだしている事業として1. 東京女性財団の助成を受けた研究「戦後50年の住宅と女性建築家の歩み」、2. 第4回UIFA JAPON総会・講演会(渡辺美紀氏によるレヒネル・エデンの建築探訪について)、3. 第11回UIFAハンガリー大会についての報告と協力の要請があった。

次に、理事会のメンバーの変更が発表された。今回の変更は体調を崩された理事の交代で、事業担当の平井美蔓氏、広報・渉外担当の船津貴子氏と大高真紀子氏が退任された。その代わりに、総務担当に沖山泰子氏が、広報・渉外担当に緑川浩子氏が承認された。

また、組織と役員とその役割分担が紹介された。

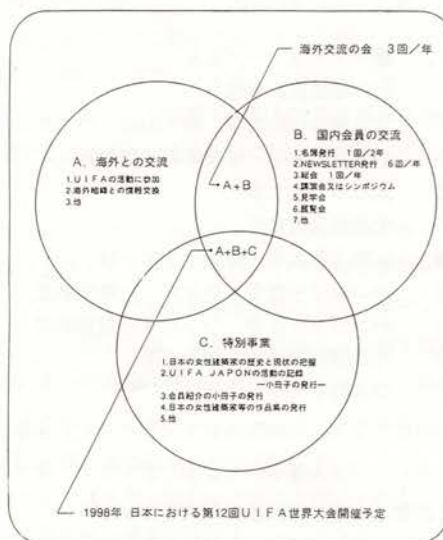
この第4回の総会の書記は川嶋幸江が指名された。

これより、司会者は中原会長を議長に指名し、議事に入った。

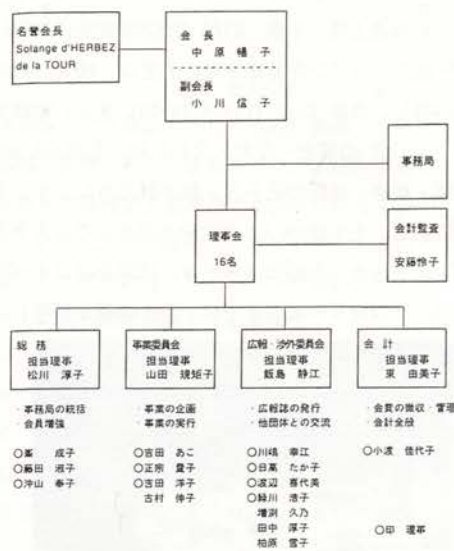
議事は1号議案の、1995年度の活動報告が事業担当の山田規矩子理事からあり、また、1995年度一般会計及び特別会計の収支報告が会計担当の東由美子理事からあった。それを受けて、会計監査担当の安藤怜子理事から1995年度の一般会計及び、特別会計の収支決算を監査した結果、適法正確との報告。意義申し立てなく、第1号案は可決された。次に、第2号法案、1996年度の活動計画案の提出と一般会計・特別会計予算案の提出。会場から反対意見はなく、第2号議案は可決された。

最後に、議長は議事録署名人として、会員の中から柏原雪子氏と宮坂雅子氏の両名をお願いした。総会は14時10分に終了。

■UIFA JAPONの活動



■UIFA JAPON組織と役員の任務分担



■ハンガリー大会参加者の紹介

東 由美子	東設計工房
日高たか子	日高たか子建築設計室
永井 彩子	建築計画連合
小林 雅子	アトリエRAUM
山本其観代	敏設計
柏原 雪子	すかいパース一級建築士事務所
渡辺喜代美	東京都住宅局
板東みさ子	第一工房
井出 幸子	アール・アイ・エー
高橋 尚美	東京都住宅供給公社
峯 成子	東京家政学院大学 家政学部住居学科
飯島 静江	日建設計 計画事務所
山田規矩子	鹿島 設計エンジニアリング総事業本部建築設計部
小渡佳代子	小渡建築設計室
正宗 量子	正宗量子一級建築士事務所
川嶋 幸江	共栄学園短期大学 住居学科
小島 久実	T・L・C (トータルライフクリエーション)
栗山 楊子	
船津 貴子	群デザインナースKK
田中美恵子	田中建築設計事務所
中原 暢子	東京家政学院大学、林・山田・中原設計同人
小川 信子	日本女子大学 家政学部住居学科
阿部 祥子	愛知みずほ大学
松川 淳子	生活構造研究所
西川 可彌	広島工業大学 環境デザイン科
渡辺 美紀	ハンガリー在中 ハンガリー建築研究
寺田 生子	ハンガリー在中 ハンガリー建築研究
古村 伸子	宅地開発研究所 横浜支所
上野 勝代	京都府立大学 生活科学部

以上29名が出席します。1998年の日本大会のアピールをしたり研究発表も3件あり、パネル展示にも参加しますので、在ブダペスト中は、忙しく活動します。帰国後の報告をお楽しみに。

■ハンガリー語のレッスン

正宗 量子

5月18日から毎週土曜日午後、UIFA JAPON事務局に総勢10名が集まり、ハンガリー語のレッスンが始まった。先生は、国立ブダペスト大学出身で、金髪の美しい浅津 Kesz Tyüs Erzsébet 女史。始終笑顔で私達を励まして、ハンガリーの歴史・自然・文化に触れながらA magyarABCから日常会話・挨拶・時計の読み方・数の数え方などを、苦しくも楽しく学んでいる。先生はハバナ大学やスペインでも文学を学び、日本人のご主人と出会ったのはスペイン。日常会話はすべてスペイン語だそうだ。ハンガリー大会までに、その成果を期待したい。



■ハンガリー大会研究発表要旨

日本における女性建築家の戦後史

小川 信子

ハンガリー大会研究発表要旨について報告します。平成8年度財団法人、東京女性財団研究活動に対する助成金を享けている研究テーマを骨子としたものであり、既に皆様方にニュースレターNo.17、MAY.1996年に報告したもので重複する部分もあります。

日本における女性建築家の戦後史—すまいに投影する女性像の変遷
1. 女性史と住居史の重なり

日本における戦後50年の〈すまい〉に関する歴史は、日本の女性建築家の登場の歴史と云えます。伝統的な日本の住居は、封建的な様式を持っており、その住居の改革を目指して歩み始め、女性建築家たちは、女性のポジションの問題にも目を向け始めました。

2. 戦後、急増する建築系コースの女性卒業生

1947年の戦後の教育基本法の改正によって、男女共学が始まり、現在のUIFA JAPONの会員の母校14校における建築系コースの卒業生は、50年間で女性が36%となっています。

戦後、女性の建築家による設計事務所の第1号は林・山田・中原設計同人であり、1958年に結成されました。社会で活躍する女性が“すまいの文化”を創り出す主役になりつつあります。

3. すまいの中の女性

第一期 民主主義の機運の中で：すまいの中における女性の場が変化してきました。

第二期 主婦は家庭のプロデューサー：1960～1970年代は、家庭の中での主婦の発言が尊重されて、すまいの設計計画に反映されてきました。

第三期 シニアの自立時代：高齢になっても、自立した生活が出来るように工夫した住宅の計画が数多く行われるようになりました。

4. 21世紀に向けて、自立を目指して

職業人として生活者として、はじめはささやかに、伝統的な家意識を打ち破り、民主的な生活拠点づくりを求めてきました。働く女性が、自立を目指すとき、個別の解決のみにまかせられず、地域との協力を考えながら生活せねばならないので、共生できる仕組みを作ることを、すまいづくりと一緒に考えていく働きも少しづつ出ています。また昨年の阪神・淡路大震災を通して、伝統的な地域のあり方を再評価し、見直さなければならない面を持っていることがわかり、新たな地域づくりのために、ソフトとハードの両面から問題は考えなければならない状況です。その基本には、すべての人に対する生活権の保障という考えがあるべきで、基本的人権を守るという面から検討されています。

なお年表を作成して、具体的な平面図を入れながら、歴史的な流れを理解できる様にパネルを展示する計画もあります。

9410078 伊藤 佐恵

現在、高齢者の居住施設等の設計中、勉強中ですが、法規化されつつある「バリアフリー」等の数値、事項について少々疑問を感じております。施設のバリエーションには必要な動きなどは充分承知しておりますが、対象が個人差のある弱者であるだけに、一つの解答が必ず正だとは限らないことが多々あり、法規化されてしまった際に、数字だけが一人歩きし、本当に居心地よい環境を見失う、逆に障害となっていくことを感じるからです。例えば点字ブロックもハートビル法で必要とされていますが、高齢者や子供、妊婦にはつまづきの原因となり、利用者の比率に応じて、敷設を検討すべきだと感じます。又、車椅子すれ違いの幅員のため決められた廊下スペースが、限られた面積の中で、居室とバランスなスケールで確保され、本来、交通量やニーズを考慮して計画して得られたかもしれない居心地を圧迫していないでしょうか。法規のよりよい形を現場の声で問いかけていかなくはいけないと思っております。(株)日建設計



趣味は旅行、陶器制作、染物等です。休日に軽いハイキングも楽しんでます。楽しい計画があったらお誘い下さいませ。

東京都住宅局住宅計画課

9310060 井出 幸子

アール・アイ・エーに入社直後オイルショックに見舞われた私の仕事は、公営住宅と福祉施設と清掃事務所だった。そしてバブルはじけの今、ふたたび公営住宅と清掃事務所を手がけている。規模はかなり大きく、時代の移りを感じさせるが、時代の変化とその要求に敏感に反応した仕事に携わってきたようにも思える。今、公営住宅は逆風に見舞われている。色々反省もあろうが、バブル期に我々は何を学んだのか見据える必要を感じる。質の豊かさ、画一でないことの良さ(画一であることの罪悪)、景観・住環境を真剣に考え、そして表現する、その表現されたものは快適であり、快感であり、また、住民に愛されるということ。これらによって、我々のまちの財産が創られる可能性があること、この確信は譲ってはいけぬものに思える。それにはまず体力と、思い立って久しぶりにスポーツクラブに行ってきた。(株)アール・アイ・エー



931002 今村 芳恵

もともと大学では文学を専攻したのですが、「建築」に携わりたいという夢を捨てきれず、日本女子大の住居学科に学士入学をしました。卒業後、建築設計事務所で3年間、戸建住宅の設計などに携わったのち、現在の職場(株)日本建築センターに移りました。



当センターは、主に建築構造や新しい工法、材料などの評定・評価機関として知られていますが、その他にも、調査研究、国際交流活動、情報提供事業など幅広い活動などを行っており、私も10年間は調査研究の部署に所属して、住宅計画や都市計画に関する委託調査業務を主に担当していました。現在は、企画部で、センターの新しい事業計画や組織全般に係わる業務を担当しています。

ものを作ることを志としたはずであるのに、徐々にそういった現場からは遠ざかった仕事に携わることが多くなり、その反動というわけでもないのですが、せめて私なりの建築計画に関する専門的な分野を持ちたいと思い、超高層居住やそれに関連した子供の生活環境の調査、また、大阪府立国際児童文学館の館外共同研究員という立場で、館の専門員と子供の読書空間に関する共同研究などを行っています。(株)日本建築センター

9310058 牛山 美緒

住宅・都市整備公団に勤めております。公団に入って数年は、多摩ニュータウンや浦安マリナーナイス地区の集合住宅の設計を担当し、現在は住宅都市総合研究所ですまい方などソフト部門の調査研究をしています。



研究内容は「女性の社会進出に伴う居住環境の整備」「家族観と居住選択(家族ネットワーク居住)」「子育て共用スペースの運営」「ニュータウンにおける団地集会所とコミュニティ」などです。コミュニティに関しては、非常時・高齢化・子育てなどにおいて近隣での助けあいや地域活動などの交流も見直されており、これまで実施した調査をもとに現在はコミュニティや施設を活性化させるためのソフト支援の実践調査を始めています。

社会の要求や今後取り組むべき課題を明らかにし、方策を提案するとともに具体的な事業に生かすことができるように努力しています。UIFA JAPONの皆さんとも情報交換し、共に学ぶことができたいと思っています。住宅・都市整備公団

9310047 石川 弥栄子

現在、東京都住宅局に住宅計画課の高齢者住宅係長として勤務しています。主な仕事は、東京都の高齢者住宅「シルバー」の推進、都や区市町村の「地域高齢者住宅計画」の策定、「高齢者等世帯向け民間賃貸住宅登録事業」や「民間シニア住宅供給推進事業」等です。



昨年、「東京都住宅マスタープラン」の分野別の詳細計画として策定する「東京都高齢社会対応住宅計画」も担当し、豊かな高齢期居住をめざして2005年に向けたアクションプログラムを策定中です。

この仕事に着く前は、東京都住宅局で都営住宅の設計、技術管理、住宅系再開発、まちづくり等の各部門、および特別区職員研修所で都市計画・建築系職員の研修等を担当してきました。(1級建築士)

法政大学工学部建設工学科建築専攻卒業、その後勤務の傍ら日本大学大学院理工学研究科前期過程(修士)を終了しましたが、学生時代とは違って、広い視野での考察ができて貴重な経験になりました。

9310085 大井 絢子

大学卒業後、3年間助手として母校に勤務、その後の設計事務所勤務、ひとり事務所時代、同窓生と場を共有する現在の事務所と働き方は変わりながらも30年余りに亘って住宅関係の仕事をしてきました。細々ながら続けてこれたのは、その時々に出会い、教えを受けた方々のおかげと感謝しております。



現在は、個人の住宅の設計、住宅メーカーへのソフト面での協力などの他に、短大の非常勤講師として住居学やインテリアを担当しています。専門家を育てるといよりは住まいについての教養を身につけることを目的としています。その延長として住まいについての理解者を増やせばと本や雑誌の執筆なども手がけています。

これからは、地域との関わりのある仕事や、住宅相談ボランティアなどに関われたらと願っています。〒113-0033 大井建築設計室

921008 大高 真紀子



数年前に独立したものの仕事がなく、やむをえず父の設計事務所の手伝いをしていううちに、図らずも様々な計画にめぐり合う機会に恵まれた。なかでも彫刻公園の改修計画やダム周辺修景計画等、土木や造園の専門家とのコラボレーションは、非常に刺激的で勉強になると同時に、建築をとりまく環境が常に私の関心事となった。ここ2~3年、ようやく自身の仕事に恵まれ、昨春は診療所が、今春には小さな児童館が竣工したが、前後してリウマチという病気になり、現在は病氣と戦いながら仕事を続けている。最近入院生活を送り、患者の半数が車椅子か足腰が不自由という状態の中、病棟は身障者対応の設計であったにもかかわらず様々な設計上の問題があり、よかれと思って設計されたものでも時として身障者にとって迷惑なものとなりうることを実感。いままでの私の経験と病気の体験を生かして仕事をしていくことも今後の私の課題のひとつかと思いつつ退院した。今後はUIFA JAPONK会員の方との交流等を通じて、常にグローバルな視点から物事を考えていきたいと思っている。

OED/環境設計事務所

■新刊紹介

「先端のバリアフリー環境」 — カリフォルニアのまちづくり —
 小川信子・野村みどり・阿部祥子・川内美彦共著
 1996年7月10日発行 定価2884円(本体2800円)
 中央法規出版社 東京都渋谷区代々木2-27-4

最も先駆的な障害者の自立生活運動、バリアフリー環境整備地域であるカリフォルニアの実践を通して学んだことを、以下の点からまとめています。

- I. 自立生活と統合教育を支えるバリアフリー環境
 1. サンフランシスコ湾岸地域の概要
 2. 自立生活の展開
 3. 統合教育
 4. ADAとカリフォルニア州法
- II. バリアフリーの環境計画
 1. バリアフリーデザインの展開
 2. 公共施設
 3. 公園・レクリエーション施設
 4. 住宅
 5. 交通施設
- III. バリアフリー環境の整備に向けての提言
 1. まちづくりについての課題
 2. 子供の環境についての課題
 3. 教育環境に関する課題

建築・環境・教育の視点から福祉をみつめ、障害のない生活環境に向けて一緒に考えていただく本です。

■第9回海外交流の会のお知らせ

— ランドスケープの役割と現代の傾向 —

アメリカに於けるランドスケープ成立の背景と社会環境、その必要性、ランドスケープの役割と現状、その中で女性の活躍等。

講師 五島聖子氏 名古屋造形大学非常勤講師 UIFA JAPON 員
 日時 1996年7月27日(土) PM18:30~20:30
 場所 東京芸術劇場(池袋駅前) 小会議室1 (5F)
 参加費 UIFA JAPON 会員 1500円, 非会員 2000円

■新役員の紹介

総務理事 沖山 奉子

はじめまして、私はこの度UIFA JAPON理事を引受ました沖山と申します。最近40代の大台にのり、もう少し落ちつかなくてはいけないと思っている今日この頃です。出身は、東京都の伊豆七島にある八丈島です。温かい島に育ったせいか、性格はおっとりしています。勤務先は、東亜建設工業㈱の第3営業部に所属しております。医療・福祉関連のコンサル的に仕事をしております。

UIFAと私の出会いは2年前、松川さんと一緒にパリへ行った時、ドラトゥールさんにお会いしたことに始まります。その後、松川さんのお誘いにより、UIFA JAPONの会員になりました。あまり真面目な会員でなく講演会にも出席しなかったのですが、今回ご縁があり、理事の大役を引き受けることと致しました。多くの素晴らしい先輩方がいる中で、動機の曖昧な私で動まるかどうか不安な面もありますが、体力だけは自信がありますので、その線でごんばりたいと思います。講演会等で見かけた際には、是非声をかけて下さい。今後ともよろしくお願い致します。 東亜建設工業㈱

広報・渉外委員会理事 緑川 浩子



マンションという殆ど近所付き合のない生活空間の中で、管理人よりUIFA JAPON会員の方を紹介頂き、会の活動に参加することとなりました。この度広報・渉外委員会理事のご指名を頂きましたが、正直なところ文章を書くのは大の苦手。今回の原稿も頭を痛めながら筆を取っている次第です。学生時代の専攻学科とは無縁の建築業界に足を踏み入れて早8年。現在事務局にほど近い不動産会社の建築課に席を置き、未だ異国語と思われる建築用語(特に施工関係)と図面の解説に忙殺される毎日です。最近では、海外交流の会の講演と会員の方からの情報によりバリアフリーの担当をするまでになり、UIFA JAPONと会員の幅広い活動と活躍の恩恵を仕事に活かせるようになりました。会員の皆さん!UIFAへの力を向けましょう。UIFAは単なる建築業界人の集まりではなく、最新情報発進基地の宝庫です。2年後の世界大会にむけより多くの女性建築家の輪を広げて活動の場に参加しようではありませんか! (株)大京

広報・渉外委員会理事 田中 厚子



入会と同時に広報のお手伝いをさせていただくことになりました。私は東京芸術大学で建築設計を学び、日本とアメリカの設計事務所に勤めましたが、子育てしながらできることとして、カリフォルニアの住宅史に関する修士論文を書いたのをきっかけに、以後、アメリカとカナダの住宅の研究を続けています。アメリカに7年、カナダに2年おりましたので、日本と北米の住宅をめぐる環境的、社会的要因の比較考察を研究テーマの1つにしています。昨年カナダから戻り、小学生3人の子育てを通して、日本の子供たちがおかれている厳しい状況に愕然としました。日本は弱者にとって辛い社会であることを痛感します。子どもや高齢者が余裕をもって暮らすために、建築の側から何ができるのか、積極的に考えていきたいと思っています。

最近、自分の事務所をつくりました。皆様にいろいろ教えていただきながら、ユニークな活動をしていきたいと思っています。どうぞよろしく。 アクセス住環境研究所

レヒネル作品の保存と再利用

渡邊 美紀

今年のUIFA国際会議の開催国がハンガリー、テーマが建築的遺産の改築と再利用ということで、もっか私の取り組んでおりますハンガリーの建築家レヒネル・エデンの作品の保存と修繕を呼びかけるのに、まさにグッド・タイミング。この機会に皆様にレヒネルを知っていただくこと、そして世界的な評価を得ることが、ハンガリー国内でのレヒネルのポジションをさらに高め、作品の価値も高まると信じております。それが改修工事につながればレヒネル・ファンとしても嬉しい限りです。

レヒネルは19世紀末から20世紀初頭にかけて活躍した建築家で、ハンガリーにおけるアール・ヌーヴォー建築の民族主義的展開の創始者とされています。ハンガリー独自の建築様式——本人は造形言語と表現しておりますが、を創りだすことに生涯をかけました。その国独自の、時代に合った新しい建築をというレヒネルの考え方は、後継者達に引き継がれ、またその有機的なデザインは現代の建築家たちの標榜とも共通したものです。

ハンガリーでは建築物に対し、建築博物館 (O. M. vH.) で保存の重要度のランク付をし、改装の制限や改修の義務が決められています。日本での文化財指定にあたるもので、外壁に「Muemlék」の板が取り付けられています。レヒネルの作品もいくつかこの指定を受けており、例えばこの2～3年で「郵便貯金局」「地理学研究所」「聖ラースロー教会」などは化粧直しされ、鮮やかな色合いとセラミックの輝きを取り戻しました。また先頃、レヒネル自身がオーナーになっていた賃貸アパートも外壁の塗り直しが始まりましたので、皆様が現地に行かれる頃にはきっとピカピカになっていることでしょう。楽しみです。

しかし現実には、老朽化が進んでいるのに資金不足で改修もままならず、かなり困った状態にあるものが多いように思います。現在苦境に立たされているのは「工芸美術館 (応用美術館)」で、地下に水が溜まり、このままでは基礎がだめになるとのことです。また「Muemlék」でないアパートや個人の邸宅は、装飾が落ちて元のように直すことはあまりありません。後のオーナーの増築で元のデザインが無残に破壊されてしまったケースもあります。

従いまして、私たちは各建物の現状を調査し、改修工事が必要なものはその呼びかけ、また本来の機能では建物の維持が難しくなっている個人所有の物件についてはその改装プランを提案したいと思います。どこまでできるかわかりませんが、なるべく具体的に、見積りなども算出し、まずは一人でも多くの方に関心を持って頂けたらと思います。



工芸美術館
(1896年完成)

市民参加によるコミュニティづくり

古村 伸子



行政が計画し、企業が実行するという形でまちづくりがすすめられることが、近年までの常識とされてきました。つまり市民が暮らし、市民が活動するまちは、市民ではなく専門家である“誰か”が計画し、つくりあげていくと考えられていました。しかし、そのまちに住む住民はもとより、そこで仕事をし、買い物をし、そしてなによりもそのまちを愛している人々が殆どかわりのない所でつくりあげられたまちは、人々にとって魅力のあるまちになるでしょうか。洋服や靴、食べ物、住まいなど身の回りのものは、本人が選びとったものであるにもかかわらず、一步家から出ると、道路、川、駅前の商店街、近所の緑など、いつも身近に接している人々と全くかわりのないところで、その将来像が決定されていくのは、とてもおかしいことだと皆さんは思いませんか。

これからのまちづくりは、市民と行政と企業が協力してすすめていく必要があると言えます。この中で市民については、これまで「決まった後で内容説明がある」という立場であったことなどから、特に「参加」を後押ししたり力づけたりすることが重要です。

一方、阪神・淡路大震災では、神戸のまちが大きな被害を受けましたが、復興にあたっては、これまでわずかながらも試みられてきた「市民参加」が大きく後退しています。さらにこの震災では、それまで潜在していた高齢者、障害者、ジェンダーの問題、在日外国人の問題などが顕在化しました。

私は神戸YWCA救済センターのボランティアとして、神戸における市民活動のネットワークである The Voice From KOBE というグループで、この6月にイスタンブールで行われた国連人間居住会議 (HABITAT II) のNGOフォーラムに参加し、神戸で著しく居住に関する人権が侵害されている実情を訴え、主にアジアの国々のNGOと情報の共有化を進めてきました。この中で、市民参加の重要性を再確認することができました。アジア、アフリカ、ラテンアメリカの国々では、先進国との関係の中で創りだされてきた貧困がますます大きな問題となり、さらに大規模土木事業に傾きがちな援助協力による矛盾の拡大が指摘されています。この問題を解決するための手立てとして、市民参加の重要性が認識されこれを積極的に推進する方策が検討されていますが、この場面で、日本において市民参加が抱えている構造的な問題と酷似した、「非効率、能力不足といった一面的な評価による参加の機会の削除」など状況があると報告されています。

ハンガリー大会ではこのような問題について、神戸、HABITAT IIのその他の内容にも触れながら、発表を行う予定です。

■寄稿 百聞不如一見 -9606-

平井 美蔓

山と川のある町

山ひだが平野へと変わりかけている所にゆったりと流れる川、背骨に山並みをかかえている日本列島では容易に出会えるような場所が、映画〈眠る男〉の舞台となっている。“光線を選び、季節を選び、見る角度を選び、そして見る人自身の心の状態さえ選べば、まぎれもなく群馬は美しい。群馬というより、私たちが生きてあるこの地は、美しいというべきでしょうか。”とこの映画監督小栗康平氏は語る。眠る男の魂の昇天という出来事のまわりに、町に居合せる人びとの日常の時間がゆったりと動く。この動きは、遠景・近景の山並み、雲の有様、川の音、月の光、深い森、風の音、樹木の肌などと微妙にもつれあって诗情あふれる情景を創っていく。「映画〈眠る男〉の森の立ち枯れのぶなの巨木の倒れる音の木霊いまも胸に」（朝日新聞・素粒子欄より）。群馬県という一地方自治体により企画された映画制作の爽やかさ。

竜巻

時折の霧雨に見舞われながら養老公園の一郭〈養老天命反転地〉（1995竣工）に降り立つ。2ヘクタールという巨大なクレーター状の楕円凹地の内部は、さまざまな凸凹・湾曲面で構成され、所々にコンクリート工作物がどれひとつとして垂直ならざる角度で地に突き刺さっている。アーティスト荒川修作とマドリン・ギンズによる建築的実験として現出したこの施設の使用法を、彼らは多くのメッセージをこめて詳細に説明している。“バランスを失うことを恐れるより、むしろ感覚をつくりなおすつもりで楽しむこと・空をすり鉢形の地面に引き下ろすようにしてみる”などがその例。地面をがっちりとらえるはずのウォーキングシューズも水分を含んだモルタル斜面上ではずるっとすべる。その恐怖が全身を包み、水平面の全くないクレーターの底では知覚がゆらぐようで、楽しむには程遠い。2時間程の散策のあと、クレーターを見下ろしながら、身体を芯を一陣の竜巻に捕らえられたと実感する。岐阜県という一地方自治体により企画された公共建築物の不可思議さ。

夢のランドスケープ

1961~1965におけるルイス・カーンとイサム・ノグチの共同設計ニューヨーク市〈リーヴィー・メモリアル・プレイグラウンド〉は実現されることのなかったプロジェクトである。この経緯を知ることのできる企画展がワタリウム美術館で開催されている。強固に反対運動を続ける市民団体の存在、ニューヨーク市当局の動きなどを当時の新聞記事からうかがうことが出来る。世界を股にかけて活躍する多忙な建築家と彫刻家の、プロジェクトに関する往復書簡からは、磯崎 新氏の指摘する「散った花火」の強さも感じとり得る。“この花火の痕跡を模型やスケッチとしてみることになるのだが、これはおそらく完成したかもしれない公園よりもっと想像をふくらますだけの中身が詰まっている”と彼は語る。ルイス・カーンの年譜をたどってみて、〈建設されず〉と明記されたプロジェクトの数の多さには、ただ息をのむ思いである。そして今はその30年後。まほろば

すぐれた良いところ、という意味の古語が〈まほろば〉である。やまとは国のまほろば たたなずく青垣山ごもれる大和しうるわし（古事記）。明日香村に程近い宿の早朝、幾重にもかさなって連なる墨絵のような山並みに遠いむかしに学んだ古文がふと胸底をかすめる。このような朝をむかえた日、大阪府立近つ飛鳥風土記の丘を訪ねる。200基以上もの古墳群があるというこの丘に、現代の古墳をイメージし、自然をとりこみ人びとが五感で感じられる建築を目指したという安藤忠雄氏の〈近つ飛鳥博物館〉（1994竣工）は抱かれている。多目的に利用されるであろう屋根部の階段状面は、遠景からは樹木や丘の稜線と馴染んだ柔らかさをみせ、近景からは木の葉がぐれに館の在りかを確認できてアプローチが心地良い。コンクリートの肌が美しい。円錐状と感じられる内部空間が、段状フロアをゆっくりと底へたどりながら展示物を観る人びとの、想念や動きと一体となっている。〈まほろば〉としての誇りのような香気ただよう展示空間である。公共施設のおいしい実例。

アトリエM

■広報日より

- 新役員を迎え、新しい顔触れで理事会も少し雰囲気が変わりました。
 - 本号は増ページし「寄稿」「新刊紹介」を入れました。忙しく楽し。
 - 「寄稿」などは長編の発表を歓迎します。第1号は平井さんです。研究発表、建築探訪、作品紹介、エッセイなどお寄せください。
 - 「新刊紹介」は、いわゆる「広告らん」です。紹介したい本、雑誌などで内容を概要化して掲載します。有料。新刊に限りません。
 - ハンガリー会議にて、1998年のUIFA日本会議のアピールをします。日本の開催地の選定などの準備にも入っています。UIFA日本会議の後援組織の推薦なども含め皆さんの協力を歓迎します。テーマ：「環境共生時代の人・建築・都市」（案）
- 21世紀における新しい調和と世界的確立を目指して女性の視点は重要なものとなるでしょう。皆さんの声をください。